

韓国と香港での研究活動報告

寺沢邦彦

この二〇一九年から二〇二〇年に至る一年間にわたるサバティカル研究年を、大学の方からいただき、前半は韓国で、後半は香港で研究活動をした。この期間の研究の目標は *Interreligious and Transnational Solidarity of Religions as Resistance to Ultranationalist Populism in East Asia and the Pacific Rim* 東アジアと太平洋圏において、ナショナリスティックなポピュリズムというものが、グローバルイズムの一つの反動として起きている。あたかも一九三〇年代から一九四〇年代の状況が再現しているかのような現象である。私の研究が、戦前における日本のキリスト教と仏教がどう協力しあるいは対立して、国家主義・軍国主義の問題に直面したのか、また韓国や中国の仏教キリスト教との卜

ランスナショナルな関係に対峙したのか。それが現今における宗教対話・協力の問題と国を超えた宗教間の連帯により、力によるナショナリズムをいかに越えていける可能性があるかを目標とした。大そうな目標だが、一応目標は目標として研究活動をした。拙論はその活動報告であり、通例のまとまった学術研究論文ではないことを、前もってご了承いただきたいと願う。

韓国での研究

最初の前半は韓国で、日韓関係において、両国が民主主義と自由主義の価値観を共有しているにもかかわらず、歴

史問題が未だに解決されていない。両国の仏教とキリスト教を通していかに歴史的和解の道の可能性があるのか。一学期だが、ソウルにある西江大学【ソガン大学】という、上智とも関わりのある、イエズス会系のカトリック大学で、訪問教授としてあゆんだ。

午前中は三カ月間の韓国語の集中講座を取った。その国を理解し愛するには、その国の言葉と歴史を知ることが大切だと思い、年齢の限界も考えずに韓国語講座に挑戦した。午後は研究活動で仏教系の東国大学の仏教学部や図書館に通い、金浩星教授にお会いした。キリスト教関係は梨花大、延世大、西江大学の宗教学部で研究した。私の関心のひとつは、百年前一九一九年、日本統治下に於ける三・一独立運動である。宗教者が主導的役割を果たし、キリスト教、仏教、天動教が協力してなした。その背景と、現代においてそのパラダイムがどう生かされるのか。三。一運動については日本語で書かれた優れた本がありお薦めしたい。澤正彦先生の『未完・朝鮮キリスト教史』は大変参考になった。

た。澤先生は、お亡くなりになったが、東大・東神大・延世大で学ばれた韓国人の奥様をもつ日基の牧師だった。

もう一つは青年学生連帯がいかに可能か。西江大学はソウルの新村という青年学生生の町にある。西江大学の隣には、メソジスト系の梨花女子大と長老派系の延世大がある。三大キリスト教私立大学があり、若者たちが多く、対話の機会を願って西江を選んだ。K-pop によって韓国語がアジア、台湾や中国、シンガポールやヨーロッパにおいても非常に注目されている。韓国文化の発信力を改めて実感する。若い人は、*not to* をとって早く韓国語を取得する。私が一番遅いので若い学生達が色々助けてくれたことが感謝であった。

韓国の一学期の間に五回のプレゼンテーションの機会があった。そんなことは初めてで、私が計画していないことがどんどん起きた。八木誠一先生がおっしゃる、極と極は通じる、日本と韓国は極と極で、その極の場所に自分を置けば、統合の力の働きの場となる

という。何か自分を越えた統合の力が働いたのか、じぶんが予想していなかった様々な出会いがあった。最初は国連平和の日での講演。韓国では国連への思いが日本と比べてはるかに高い。朝鮮戦争で一六カ国で形成された国連軍が韓国を守ってくれたことで、国連平和の日が毎年行われている。高校生や大学生がクラスごと参加し、地域の宗教家や社会活動家も参加している。私は宗教対話と協力と平和の主題で講演させて頂いた。多くの社会活動家、平和運動家と交わる機会があった。宗教学界では韓国の円仏教と日本の立正佼成会の方たちやその学生たちも参加されていた。この二つの新しい仏教教団が日韓交流を熱心にされていることに感銘した。ソウル大学の日本研究所の趙寛子先生 (Jo, Gwan-jai) とカンフアレンスで出会った。趙寛子先生は、東大で日本思想研究の博士号を取得され、戦前の親日家とレッテルを張られている方々にも、深い愛国者もいたという観点を、韓国で初めて提供した学者だ。ソウル大学の日本研究所におい

て日本思想研究会があり、私に何か話してくれと頼まれた。東大の宗教学科で博士号をとられ、漢陽大学で教えておられる Park Kyutae 先生が会長で、日本思想研究会が開かれている。その中で日本思想を研究している若い韓国人研究者たちと交わる機会を得た。テーマは日本の宗教思想と政治で、日本統治下における李朝時代とは違う儒教解釈、またイエズス会の伝道が日本の思想に与えた影響などの発表があった。私は妹尾義郎の社会的仏教と反戦運動について発表した。活発なディスカッションを韓国の日本思想研究者たちとできたことは大きな収穫だった。

その後、西江大学で *Modern Religious Movements in East Asia* シンポジウムがあった。フィリピンやノルウエーや香港の学者、日本から宗教情報センター所長の井上順孝先生も来られ、シンポジウムが開かれた。韓国の学者も多数来ていて、シャーマニズムの韓国宗教への影響についての発表は興味深かった、私は戦前におけるキリスト教青年運動と仏教青年運動と、それらの現代の宗教青年運動と

の関連について発表し、デイスカッションの場を持った。日本の新宗教が韓国で注目されている。韓国の立正佼成会本部を訪ね、法座にも参加させていただき、会員の方々と交流した。特に婦人たちの活動が活発である。また創価学会の韓国の本部を訪ねた。日本における創価学会のイメージより、韓国における創価学会のイメージのほうがはるかに高いことを発見できた。日本の新宗教が韓国において困難な中にも、どのように適応していくのか興味深かった。

前にも述べたように三・一運動について、一度その宣言文を、日本語で訳されているので、お読みになるのをお勧めしたい。その中に日本を糾弾する言葉は書かれていない。日本と韓国が良きパートナーとなって中国を救っている、東アジアを救っているという。大局的観点に立っている。キリスト教、天道教と仏教の協力による非暴力の運動だ。その背景を色々研究してみると、三・一運動は一国を超えた宗教的な連帯があったことが分かる。吉野作造、東京帝大教授は、キリスト教徒で本郷教会員でもあり、

朝鮮や中国の学生たちをYMCAを通して献身的に世話をしていた。一九一九年二月八日に韓国の学生たち六〇〇人が東京YMCAに集まり独立宣言を読み上げた。吉野の学生が草案を書いて、それが韓国の三・一運動の宣言文に大きな影響を与えた。三・一運動の三三名のリプリゼンタティブのうち、一六名がクリスチャンで、一五名が天動教、二名が仏教代表者だ。二百万以上の人が参加。一五〇〇回のラリーが行われた。日本の官憲に七五〇〇人が殺され、一万五〇〇〇人がケガをし、四万六千人が逮捕されたという。そういう中でこの運動はトランスナショナルなインパクトを持って、中国にも波及し、北京大学を中心として、韓国の学生たちがこれだけ頑張っているいうことで、歴史的な五・四運動がおこった。三・一運動の挫折で、韓国亡命政府が上海につくられた。吉野作造は彼らを東京に招いて記者会見を行った。一国だけではないトランスナショナルな関係を見ずして近代史は解けないことがわかる。そして三・二運動の時に多くの人をかくまったという、メソジ

ストの貞洞教会を訪ねた。この教会はアメリカの宣教師アベンゼラーによって設立された最初のメソジスト教会だ。アベンゼラーは私も学んだ Drew ドゥルー神学校の卒業生だ。朝鮮で宣教につとめ、川に溺れてる朝鮮の少女を救うために命を落とした。私は青山学院とメソジストの関連で Drew に行つて勉強したので、感慨深い。西大門刑務所を訪ねた。独立運動に関わつた人たちが入る刑務所だ。日本統治下においていかに多くの苦しみを与えたかを知れる内容であった。とくに柳寛順（ユ・グアンス）が、一八歳の少女で、梨花学堂のメソジストの信者だったが、刑務所で独立を叫んで殺された場所は忘れられない。

通りに出ると、当時貿易輸出規制の問題で安倍政権と韓国政府が対立したこと、多くの看板やすだれがあった。けれどもそのなかには反日とは書かれてなく、反安倍と書いてあることに彼らの配慮を感じた。

Drew を出た韓国の牧師や神学者がソウルにたくさんいることは知っていたが、二〇年前に勉強したので、どこに

行つてるのかわからないクラスメイトが多い。私は Drew に頼んで卒業生の名簿を貸してくれないか、メールを出して、私の韓国の研究に協力してくれるよう呼びかけた旨をしらせた。Drew の校友会はそういうことだったらいいと、韓国にいる卒業生の名簿とメールアドレスを送つて頂き、私もメールを送った。すぐさま反応があり、崇実大学でキリスト教倫理を教えている三年ぐら以後輩の方から返事を頂き、新村でお会いした。今のキリスト教の現状、キリスト教と若者たちの関係など、いろんなお話を伺い、深い出会いがあった。その方によると、崇実大学の由来は、戦前、北朝鮮の平壤で大リバイバルがあり、平壤があたかも東洋のエルサレムと言われるぐらい、キリスト教が復興した時に作られた長老派の学校だった。日本統治下において神社参拝を強要され、最後まで抵抗して、総督府によって潰された。朝鮮戦争の際に南下して、現在の崇実大学がソウルで創設された。今度、私を招くから話しをしてくれと言う。日本人を招いて話したことは、ほとんどないそ

うだ。神社参拝に最後まで抵抗したことを誇りに思っている大学である。私は近代日本のキリスト教と仏教、国家神道との緊張関係の内容で話した。崇実大学は神社参拝に最後まで抵抗した大学として有名なので、日本人を招いて講演会をやったことで、新聞が関心を持ち、全国日報の国民日報が、私にインタビューさせてくれという。わたしは無名の学者なので予想していなかった。これも統合力の働きか。インタビューでは日韓関係の改善は悔い改めと許しであることをいった。参照：<http://news.knib.co.kr/article/view.asp?arcid=0924109823>

私の意図が一〇〇パーセント伝わっていない面もあるが、大体は日本の教会は過去の軍国主義への協力を自己検証し悔い改め、韓国の教会と連帯する。また韓国教会は許しのメッセージを日本の教会に送ることができるならば、日韓の歴史的和解になるだろうと話した。とくに一九六五年の十一月にポーランドの教会がドイツの教会に送った手紙についてだ。ポーランドのビショップがドイツのビショ

ップに送った内容で、結局、ドイツの罪はドイツの罪だけではないと、これは全人類の罪であり私の罪であるから、それを私の問題として、人類の問題として悔い改めないといけないことをポーランドのビショップがドイツ教会に送った。それによってドイツ教会も真剣に過去と向き合う機会となった。それが西独のブランド首相のワルシャワにおけるひざまつきの悔い改めにつながったという内容だ。悔い改めと許しというものがあって初めて新しい変化が生まれるのでないか、日韓関係においてもそれが可能だという問題を提示した。

そのあと、また西江大学で宗教と法と国家の内容でシンポジウムがあり、私は、西田幾多郎と宗教と学問の自由、世俗的ナシヨナリズムとの葛藤²で発表した。

ナムムの家という元慰安婦の方々が、共同生活している所がある。亡くなられた方は像を立てている。今はもう四名の生存者しかいないという状況の中で、私自身も訪ねさせて頂き、お話を伺った。彼女たちの痛みは全て理解でき

ないにしても、一人の人間としてその歩みを傾聴する大切さをかんじる。慰安婦問題にはいろいろな意見がある。その応援団はいろいろあり、それを政治的に利用する応援団も日本、韓国両方にいる。しかし日本政府関係者は誰も来たことがないという。彼女らが何を願うかと私も聞いた。お金ではない、本当の謝罪の心を欲しいんだと。だから、彼女たちが生きておられるうちに、何かできないだろうか。米国のオバマ大統領は広島に来て被爆者の方々をだきしめた。その返礼で安倍首相は真珠湾攻撃の生存兵のまえでひざまずいた。日本政府は国際法上で決着がついたというけれども、人間の普遍的な道徳性にたつて、日本の首相が彼女たちの生きておられるうちにその痛みを理解しようとして、彼女たちに直接会って頂きたいと切に願う。

私は韓国の学生と院生と話す機会が多くあった。今の韓国の学生たちは本当に親思いで勉強家だ。親孝行という言葉があるが、韓国の学生を見ればよく分かる。親がほんとに犠牲になってこの子供たちの教育のためにやっつてること

を知っているが故に勉強家だ。そのために競争も激しいのが心配だ。韓国人学生は個人的には日本が好きで、興味があるし、話しかけてくる。団体になると少し違う。だから色々率直にいつてくるし、文句も言ってくる。率直に言うのは、逆に言えば、近くなりたいが故に、本当の友達になりたいために、自分の心の中にしまっているものを言うという。それは日本人の場合は、ちよつと距離を置く、淡白さがある。韓国人の場合は、ほんとうに心からなる友人になりたいが故に、これだけはわかってほしいという気持ちで率直に言うのだと私は感じる。

韓国の若者の教会離れが起きているという。教会の中の格差が生まれているということ、今、彼らの中に教会に行けない若者たちの集まり、カナンの会というのがある。そこに内村鑑三というより、内村鑑三の弟子であった金教臣（キムギョシン）とか、韓国のガンジーと言われる咸錫憲（ハム・ソコン）の本が読まれているという。最終的に内村に対する関心も広まっているという。新宗教の田仏教

は宗教対話に熱心である。伝統的キリスト教と仏教との対話もう一歩で、隔たりがある。だから本当に日韓の草の根の対話、痛みの共感っていうことが重要であると感じた。今の南北分裂も間接的に言えば、やはり日本統治下における抗日運動から共産主義も入ってきた。単なる他人の問題ではなくて、やはり近代日本がお隣さんとの近所付き合いで失敗した。土足で近所の家に入りこんだ。近代日本が自分を愛するように、隣人、ご近所を愛してきたかを問われているのではないか。ご近所付き合いもまともにできない国を世界が尊敬信頼するだろうか。また近代史だけで見ていると、見えてこない世界がある。古代史における日本と朝鮮とのつながり、新羅・百濟。高句麗の時代から考えるともえてくるものがある。予想以上多くの帰化人が日本に来ていたという。聖徳太子の先生が高句麗の僧の恵慈であったこと。二五〇年にわたって、江戸時代において、日本と朝鮮が儒学を通じて平和交流があったこと。そういう前近代史も見えていかないといけないと実感した。

香港での研究

次は香港に行く。半年間、香港恒生大学のアジア学科の訪問教授として、アジアの宗教と社会というクラスを三二人の香港の学生に教えた。途中パンデミックのためにオンラインになったが、できるだけ学生たちと直接対話の場を持つとした。いかに諸宗教と青年学生、学者が連携して、民主化人権問題を進めるかという問題をしりたかった。香港では、香港大学、香港中文大学、香港バプテスト大学は全部公立だ。香港恒生大学は有名な私立だ。これは最初の第一日目に行った時に中国からの留学生も来ていた。彼らたちは武漢が故郷で、今コロナのため、旧正月は帰れないってことで、学生たちと最初の第一日目にあった。キャンパスでは光復香港時代革命いう内容がいたるところに貼ってあり、毎日、香港の学生たちが、弾圧された内容が写真となっている。私が香港での活動をまとめた短い小論拙論がありぜひご参照願いたい。参考論文…日本では地球座の、香港学生はアジアの宝であ

る、<http://chikyuzanet/archives/104229> 米国ではリベラルなキリスト教全国月刊誌 Living Lutheran に掲載した。香港における民主化の葛藤”である。<https://pubs.royle.com/publication/?m=62112&i=669240&p=42&pre=1> もっと大きな字でお読みになりたい方は https://pubs.royle.com/publication/?m=62112&i=669240&view=article&browser&article_id=3735240&pre=1

香港には一九三〇年代からノルウェー系のルター派ミッシュナリーのカール、レイチェルトという人が Buddhist-Christian Dialogue Center が道風山に作られている。わたしも訪ねた。そこにはいかに中国にキリスト教を、中国にふさわしいキリスト教をつたえるかという研究所もある。ここでは、パルトとかボンヘッファーを中国語に訳して、学術書として中国の大学に送っている。宗教団体としては今の中国に入れないので、あくまでも学術書で、キリスト教思想を中国に訳して、送っているという。聖殿もあり、ネストリウス派の研究もされている。聖殿の鐘も仏教の蓮の

葉のなかに十字架があるユニークな聖殿で、瞑想する場もあった。ちょうどその向こう側の山に仏教の寺院がある。

香港中文大学という優秀な公立大学がある。そのなかに神学部がある珍しい公立大学だ。香港の各教会が出資し合っつくり、政府はお金を出していない。その神学部のまえにはベテロとイエスの洗足の像があった。神学部には宗教対話の部門もあり、頼品超 (Pan Chiu Lai) 教授は、いかに仏教との対話を通してキリスト教神学が進化していくかという優れた論文を書かれている方でいろいろお話できた。民主化のクリスチャンの学生たちから聞いたが、八〇〇〇人近くの学生たちが逮捕されている。五〇〇〇人近くの人たちが理由がわからないけれども、死んでいるという。彼らは信仰をかけた闘いをしている。祈らざるを得ない。香港のルター神学校を訪ねた。アジアの神学教育の中心となり、学生がシンガポール、東南アジア、中国からも来ている。非常に美しいキャンパスで、仏教キリスト教の対話の道風山のすぐそこにあった。その教授たちとも

交流した。彼らの苦しみとこれからせまりくる迫害についてきく。わたしも国際世論の力でなんとか支援できないかを痛感する。

私は香港の仏教学者とも交流したが複雑な問題があった。仏教徒の学者、仏教徒の方たちのなかにはあまり、学生の民主化運動に対して積極的に支援しないかたもかなりいる。大陸仏教とのコネクションが強いために、むずがしいことがあるのか。香港仏教はマインドフルネスとか瞑想とか、そういうことには集中する。民主化運動、人権問題に対して、香港の仏教は参加できないのか、したくないのか。それを彼らに聞いてみる。やはり英国統治時代に遡るといふ。英国総督府は、どちらかというところ、キリスト教を優遇したという。そういうリゼントメントが香港の仏教徒の中にあり、中国が香港を統治することによって、香港の仏教は、キリスト優遇政策から解かれたという気持ちがある。仏教徒とキリスト教の民主化への共闘というのは単純ではないと感じた。台湾では仏教とキリスト教が協力して

民主化を進めていると聞いている。また香港の仏教というのは、中国大陸仏教と違って、文化大革命の洗礼を受けていない。あの激しい迫害を受けていないために、香港の仏教は道教とミックスした形での習俗化の面が強いという学者もいた。

私は最後に香港を去る前に自分の研究の一つのまとめとして、香港恒生大学で *Interreligious and Transnational Solidarity of Religion as Resistance in East Asia and the Pacific Rim* を発表した。ほかの香港の大学にも Zoom でつたえられた。多くのコメントをたまわりデスクッションができた。将来のアジアにおける宗教の自由と対話・協力と民主主義の課題について、中国共産党支配をまえにして、彼らの苦悩と、現実と理念の乖離をしる。国家安全法が実施される一週間前に日本に帰ってきた。本当に厳しい現実が香港の学生と知識人にまっついている。彼らのために祈らざるを得ない。日本の仏教とキリスト教が韓国中国アメリカの仏教キリスト教との連携により、力によるナショナリズムを防げ

なかった教訓を、いまロシアのウクライナ侵攻、中国による香港新疆弾圧、台湾威嚇の問題のなかで、どのように生かされるのか。まだ完全な解答はでない。しかし今回の韓国香港での研究で、色々見え始めた地平線がある。東アジアのコンテキストにおける儒教の基盤である。国家主義に利用される反面、儒教の「文」に象徴される教育の伝統、教授と学生の大切さである。数々の宗教対話協力も学生青年と教授学者の働きがエンジンになる。吉野作造のトランスナショナルなYMCAは示唆にとむ。それが宗教多元的な青年学者の連帯にむかい、力によるナショナルリズムを克服する、宗教対話協力のエンジンになれるかは今後の課題だ。特に宗教の自由と民主主義を共有する日本・韓国・台湾・インドネシア・シンガポール、そしてアメリカにおけるモデル作りが肝要だ。それをいかに中国や北朝鮮、ロシアの青年、学者、宗教界に及ぼすかは、今後の我々の知恵と経験と情熱にかかっている。

てらさわ・くにひこ

米国ワートバーグ大学准教授